「持田さんとのわずかばかりの手紙の遣り取りから」「持田季未子さん追悼文集」刊行委員会編
『持田季未子さん追悼文集』「持田季未子さん追悼文集」刊行委員会　2019年12月18日　86-89頁

持田さんとのわずかばかりの手紙の遣り取りから

稲賀　繁美

広島の里に戻って、書庫のなかから『絵画の思考』を引っ張り出した。マーク・ロスコの抽象画の表紙も美しい名著で、吉田秀和賞受賞作である。手元に置いておきたかったのだが、昨今の行政改革とやらの煽りで、もはや物理的条件がそれを許さない。著者からご恵投を得た一冊だが、あいにく京都の官舎で台風のおり逆流した雨に浸かってしまい、アート紙の装丁だったことも災いして、ゴワゴワなうえに紙面が相互に癒着して、満足に頁を繰ることもできない。だが、そこには最初に拝読した折の感激をつづった葉書のゼロックス複写が挟まっていた。これをここで活字?に起こせればよいのだが、あろうことか、葉書の表裏の文面が同一の箇所に重ねて印字されており、容易に判読を許さない。持ち前のケチ根性からだろうか、裏表のコピーを取る際に、重ねて印字されたものを反故にはせず、それだけを保存していたらしい。以下、判読不能な箇所は諦めつつ、復元してみる。

前略、篠原さんの『トランスクリティーク』にあわせて『絵画の思考』拝読しました。『生成の詩学』においてすでにみられるみごとな行文と明確な問題意識、それに沿った主題と解釈、いずれも卓見と申すほかなく、［以下、字が重なっており、1行解読不能］、などと書いていたところで、…ご恵投いただきました。…論旨と……てゆく迫力、そして次々とわいてくる着想がそのまま文章となってゆく様。これは憑きものの文章としか申せませんが、正直申しましてPh.Dなんぞ書いてしまってinspirationがコカツしてしまった凡才としてはセンボーをいだくどころか、いささかイフの念を抑えがたく。かっこうをつけたがる凡百の詩人の間を縫って、本当の詩魂がオーイツする様も超人的で、こんな書物、ちょっと他にありません。（毎頁、線をひかなくてはいけない）。やはりモンドリアン論はすばらしく、華岳とモネは対をなし、ロスコはモネと共鳴しつつモンドリアンとむすびつく。Earth workとロスコがmacroとmicroの関係にありましょうか。地水火風に人の意志たる線、額ぶちの有無、絵の大小、閉じるか開くか、一人か多数か、矛盾の相克としてのモネ、秩序の「湧く」モンドリアン。「痒み」と騒音の華岳、モネにおける飛翔の錯覚、デコラシオンと空間体験、小生□□□［アルファベットらしいが、切手の場所と重なっていて判読不能］末から後はDecoの時代と思い、通説の塗り替えを試みているところで「境界」と「接点」の設定にたゆたい…□□めぐっています。Kaïというフランス在住の日本人に□□□［同上］、棚谷勲展（5／7―16：銀座みゆき画廊）参考になるかと存じます（画面における時相のかさなり…）［以下、葉書表へ］

本年からできた大学院で「藝術学」をやらされ、入試に持田さんのご本の文章を使わせていただきました。論旨がパラグラフごとで完結していて、しかも想像をいざなうからです。

5月10日までAnne-Marie Christinが日本に居ます。京都市左京区［アルファベットが別の字と重なって判読不能］Isshodamachi, Shugakuin International House, tel.712-95-03です。

それまで文通などする縁故もなかった十歳も年上のお姉様相手に、我ながら、すいぶんと生意気なクチを効いている。『絵画の思考』は一九九二年四月二十二日発刊と奥付にあるから、その直後の五月ころに認めた葉書かと推定できる（投函まえに複写を取っているので、消印はなく、日付も確認不能）。アンヌ＝マリー・クリスタンは当方のパリでの指導教官となった記号学者で、当時、京都大学人文研究所の宇佐美斉先生の招きで来日していた。別の場所に、吉田城・典子夫妻の招きで、と誤記したことがあるので、ここに訂正する。昨年、マリアンヌ・シモン＝及川さんほかのご尽力で、水声社から『テクストとイメージ』と題された追悼論文集が刊行されている。はたして持田さんはクリスタン女史に会う機会はあったのだろうか？「甲斐」とあるのは当時付き合っていた造形作家だったが、今どうしていることか。棚谷さんは版画家として著名だった。なにかの縁で知己を得たのち、ヴェネチア大学での「日本再考会議」（一九八七年開催）でもひょんなことから再会した。だがこの数年後には、惜しくも夭折された。ご夫人は小磯良平のお嬢さんだったはずである。

思い返せば、筆者には持田さんと直接おしゃべりをした記憶はほとんどない。『絵画の思考』には、書評をものし『比較文学研究』誌上に掲載されたが、これも右に披歴したような感激あって、思わず執筆したにすぎない。今から思えばお亡くなりになる直前、芳賀徹氏の祝賀の宴席で、それは短い挨拶を交わしたのが、今生の別れとなった。その少し前に、生前最後のご著作となった『セザンヌの地質学』の書評を「図書新聞」に掲載したが、これにはノロノロしていると誰かほかの人に書評されてしまう、という焦りがあった。ご恵投頂いた『明治の精神：持田巽』についても書簡の往還があったが、生憎、発見できない。遺著『美的判断力考』を今読み終えたところだが、この著書への所感には場所を改めたい。

二〇一九年八月十四日　台風接近の夜　故郷の広島にて